

# ハーバード便り

（最終号・2005 年 3 月 25 日）

## 1．文化の中心として

2004 年 4 月から 1 年にわたりお届けしてきたハーバード便りも、帰国を控えた今回が最終号。ボストンやケンブリッジの風景、大学での生活の様子、アメリカ政治の動向など、楽しんでいただけたでしょうか？最終回は少し話題を広げ、ハーバードと地域のかかわりについて書いてみたいと思います。



手始めに、美術館と大学の関係を見てみましょう。有名なボストン美術館には、ヨーロッパの印象派絵画から日本の仏教美術まで、幅広いコレクションが展示されています。

新興のバックベイ地区に聳え立つボストン美術館正面。

感心させられるのは、こうしたコレクションを上げるために、大学も協力を惜しんでいないということです。たとえば、エジプト部門展示品の一部は、かつて 20 世紀前半にハーバードの発掘隊が自ら収集してきたものです。



左は快慶、中央はモネの作と、コレクションの豊富さは一級品。右はエジプトからハーバード発掘隊が持ち帰った棺です。

さらに、ハーバード自体も 3 つの美術館と 4 つの博物館を有し、学生は無

料、一般訪問者も安価で、貴重なコレクションを見学することができます。大学とボストン美術館は地下鉄で 30 分程度の距離ですから、全館を 1 日で回ることも可能です。大学と地域が一体となって文化を育てているわけですね。



左は大学の民族学博物館にある北米先住民の遺跡。右はハーバード東洋美術研究の 1 拠点、アーサー・M・サックラ美術館。

これは音楽にも当てはまります。3 月半ば、かつて小澤征爾さんも指揮したボストン交響楽団の演奏会に行ったのですが、その前日には指揮者や歌手を招いての講演会がハーバード大学音楽学部で行われました。演目のワグナー『さまよえるオランダ人』について、新解釈を提示するという試みです。この講演会を踏まえて翌日の演奏を聞くと、より深い理解が得られる仕組みです。



右上が音楽学部講堂での講演会、右下がボストン響本拠のシンフォニー・ホール。両者はバス 1 本で 15 分、100 円程度という近さです。

ハーバード大学は確かに世界でもトップ・クラスの頭脳が集まった一流大学です。しかし、一流である理由は、必ずしも教員・学生の能力の高さや経営の巧みさに尽くされるわけではありません。社会の真中で文化の架け橋としての役割を果たすこと、その役割を果たすだけの高度な研究を継続させる意欲、それが大学に対する地域の理解を呼び、地域に対する大学



の貢献を深めていきます。ボストンとハーバードが教えてくれているのは、大学とは大学単独で育つものではなく、人々の理解の中でこそ育つものである、ということなのではないでしょうか。

## 2．いるべき場所へ

さて、冒頭に書いたとおり、私の在外研究期間は 3 月 31 日で終了、日本へ帰国します。ハーバードでの 1 年間は、世界最先端の研究成果を吸収すると同時に、帰国後立正大学でどのような講義と研究をしようかと思いをめぐらす日々でもありました。今は、再び 1108 教室で政治学原論の教壇に立つ日が、そして研究室でゼミ生と議論をする時間が、待ち遠しく感じられます。ハーバード大学は素晴らしい大学ですが、私のホーム・グラウンドではありません。レッド・ソックスに小さくとも親しみ深いフェンウェイ・パークという



本拠地があるように、私には桜の咲き誇る、そして新緑の萌える、立正大学のキャンパスという本拠地があります。

帰ります、自分のいるべき場所へ。

・・・ところで、

**ゼミ生にはお土産あります  
お楽しみに！**

（ハーバード大学客員研究員 早川誠：mhykw@ris.ac.jp）